

平和地区

平和地区は、一八八九年（明治二十二年）に五か村の合併でできた平和村を継承したもので、「村の平和を希望する住民の念願」により新しい村名が付けられました。

江戸時代からの平木、東谷ひ



中世集落の名残を感じさせる星宮神社（平和地区平木）

がしや）、上谷中、荻野おぎの、川向の五か村には、つねに周辺村むらとの水争いがありました。そうした歴史を示す石碑があり、改修された念仏（ねんぶつ）川沿いに、「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」と、一七五七年（宝暦七年）の年号が刻まれています。この石の由来を

知る記録は見つかっていませんが、水争いでの犠牲者を供養したという言い伝えがあります。

記録に残るものだけでなく、一七二九年（享保十四年）から一七四五年（延享二年）にかけての上谷中村内の上谷と下谷集落の争論、一七四六年（同三年）の平木村と西小笹村の争い、一七九〇年（寛政二年）から翌年にかけての荻野、川向、大塚原（旭市）の三村による念仏川をめぐる水論、一八六〇年（万延元年）の上谷中村と籠部田村の

沼をめぐる争論などが知られています。いずれも沼や川をめぐる排水、沼の干拓による利害関係が対立を生みました。

平和地区の村むらは、市内北部の集落より新しい印象がありますが、この五か村ともその成立は中世までさかのぼります。一二七二年（文永九年）の記録に見られる匠磋南条莊東方新田は、平木の御門（みかど）周辺と考えられますし、東谷の安養（あんよう）寺は南北朝時代に現在の茨城県水戸市周辺の寺院と僧りよ間の交流が見られました。

明治になって、東谷村の角田伝右衛門は県から養蚕世話役を命じられ近県の先進地視察などの成果として同村に養蚕伝習所を設置するなどの業績を残しました。また、ハリストス須賀正教会から分離した、平和教会が設立されるなど新しいいぶきも芽生えました。

明治二十二年の合併にあたり、五か村は明治初年から同一の歩みがとられたため、江戸時代の争論のなごりは自然に消えたのでしょ。二、三の沼も耕地整理が行われ、一面に水田が広がっています。戦後は植木産業が活況を呈し、かつて水争いに明けくれた歴史は消え去り、新村名にふさわしい地域となりました。